

報道資料

開催のご案内

没後四〇〇年特別展

長谷川 等伯

没後四〇〇年 特別展

長谷川等伯

2010年は、桃山絵画の巨匠、

長谷川等伯（1539～1610）の没後400年にあたります。

水墨画の最高峰「松林図屏風」（国宝、東京国立博物館蔵）、

金碧障壁画の至宝「楓図」（国宝、京都・智積院蔵）などを描き、

当時の画壇に君臨する狩野永徳をも脅かした絵師、等伯。

能登七尾（石川県）に生を受けた等伯は、

はじめ「信春」と名乗り主に仏画を描いて活躍、

やがて30代で上洛すると仏画、肖像画、花鳥画など多岐にわたる画題を、

時に精緻に、時に豪放に描きわけ、

豊臣秀吉に重用される時代の寵児となりました。

72歳で生涯を終えるまでに描いた作品は、

今なお色褪せることなくみる者を魅了し続けます。

また、彼のたどった波乱万丈の生涯、

残された人間味溢れるエピソードも、我々をひきつけてやみません。

本展は、長谷川等伯の幅広い画業を網羅する大回顧展です。

郷里七尾で「信春」と名乗った初期の作品から上洛後「等伯」と号して

大徳寺をはじめ京都の名刹に揮毫した

数々の国宝、重要文化財作品まで、一挙公開。

桃山の鼓動を伝える作品群と、それを創出した等伯の人間ドラマを

没後400年の節目の年にご紹介いたします。

「東京展」

会期 2010年2月23日（火）～3月22日（月・休）※計25日

休館日 月曜休館（ただし3月22日（月・休）は開館）

開館時間 午前9時30分～午後5時、金曜日は午後8時まで、

土日祝休日は午後6時まで（入館は閉館の30分前まで）

観覧料

一般・当日／1500円（前売／1300円、団体／1200円）

大学生・当日／1200円（前売／1000円、団体／900円）

高校生・当日／900円（前売／700円、団体／600円）

※中学生以下は無料

※前売券は、2009年10月14日（水）～2010年2月22日（月）まで、

電子チケットぴあ、ローソンチケット、ファミリーマート、CNプレイガイド、

イープラスなど主要プレイガイドで発売。

※お得なペア券2枚セット／2000円

2009年10月14日（水）～12月23日（水・祝）までの期間限定発売

会場 東京国立博物館（台東区上野公園13-9）

主催 東京国立博物館、毎日新聞社、NHK、NHKプロモーション

一般問合せ 電話 03-5777-8600（ローダイヤル）

ホームページ 展覧会ホームページ＝<http://www.tohaku400th.jp/>

東京国立博物館ホームページ＝<http://www.tnm.jp/>

「京都展」

会期 2010年4月10日（土）～5月9日（日）※計27日

休館日 月曜休館（ただし5月3日（月・祝）は開館）

開館時間 午前9時30分～午後6時（入館は閉館の30分前まで）、

金曜日は午後8時まで夜間開館（入館は閉館の30分前まで）

観覧料 一般・当日／1400円（前売／1200円、団体／1100円）

大高生・当日／900円（前売／700円、団体／600円）

中小生・当日／500円（前売／300円、団体／200円）

会場 京都国立博物館（京都市東山区茶屋町527）

主催 京都国立博物館、毎日新聞社、NHK京都放送局、NHKプラネット近畿

一般問合せ 電話 075-5525-2473（テレホンサービス）

ホームページ 京都国立博物館ホームページ＝<http://www.kyohaku.go.jp/>

「両会場共通」

プレス問合せ 没後四〇〇年 特別展「長谷川等伯」広報事務局（ユース・プラザセンター内）

担当 高橋池袋

電話 03-5467-8638（午前10時～午後6時 土日祝日を除く）

E-Mail tohaku400th@yppcpr.com

後援 文化庁

特別協賛 大塚家具

協賛 J R東海、大成建設、日本写真印刷、みずほ銀行



本展の特色

1. 史上最大にして最上の大回顧展です。
2. 国宝3件、重要文化財約30件、重要美術品1件を含めた約80件の名品を一堂に紹介いたします。
3. 国宝「松林図屏風」(東京国立博物館蔵)、国宝「楓図壁貼付」、国宝「松に秋草図屏風」(京都・智積院蔵)は両会場ともに全期間公開。
4. たて10m×よこ6mの迫力！
巨大「仏涅槃図」(京都・本法寺蔵)を展示いたします。
5. もう一つの松林図、「月夜松林図屏風」(個人蔵)を公開(東京では初公開)いたします。
6. 「あっという間に終わってしまう!?!」
東京25日間、京都27日間の“超短期開催展”です。

主な展示作品でたどる等伯の人生



②



①

重要文化財 三十番神図①

長谷川等伯(信春)

1幅 絹本着色 94.5×39.1cm

永禄9年(1566) 富山(高岡市)・大法寺蔵

●当代随一の仏画

信春時代に描いた仏画のなかでも、とりわけ華麗な色彩が施されている。三十番神は、ひと月三十日の一日ずつに一神をあてて守護神とされた、法華經を信仰する人たちを守る善神である。

大法寺には本作品と永禄7年(1564)、等伯26歳のときに描いた「日蓮聖人像」など3幅の仏画がともに伝わっている。それぞれは、丹念に細かく描写されていて、信春時代の日蓮宗関連の画業に携わる活動内容と作風の特徴が色濃くかえる。

重要文化財 日堯上人像②

長谷川等伯(信春)

1幅 97.5×49.0cm 絹本着色

元亀3年(1572) 京都・本法寺蔵

●天下無双の肖像画

白い法衣をまう本法寺の第8世日堯上人が説法する姿。上人の清らかな人格が描写されているかのようである。

この作品の署名によって等伯と信春という絵師が同一人物であると確認され、昭和13年(1938)、土居次義氏により「長谷川等伯信春同人説」が発表されることとなった。

長谷川等伯研究史上、極めて重要な作品である。

等伯の生家奥村家の菩提寺は能登にある日蓮宗寺院の本延寺で、本山が本法寺であった。等伯はこの本法寺の伝手によって上洛し、京都や堺で活動した。

T O H A K U



⑤

波乱万丈——長谷川等伯の人生

元亀二年頃
(一五七二頃)
三十三歳頃

◆能登の絵仏師、京都へ

等伯は、戦国大名畠山家臣奥村家の子として生まれたが、染色業を営む長谷川家に養子に入った。養祖父、養父に絵の手ほどきを受けた等伯は、信春と名乗り、日蓮宗寺院に關わる仏画を多く描いた。戦乱の波のうねりは能登にもおよび、画業を続けることが困難となった等伯は、父母を亡くしたことを契機に、30代という決して若くはない年齢で、京都に新たな活躍の場を夢見て上洛した。

図版①、②参照

天正十七年
(一五八九)
五十一歳

◆狩野一門の牙城へ——金毛閣天井画

40代の等伯の京都での活動がどんなものであったか、ほとんどわかっていない。「等伯」の名が最初にあらわれるのは、京都の名刹、大徳寺である。大徳寺では室町時代以来、狩野一族の多くの絵師が障壁画を制作しており、まさに狩野一門の牙城であった。

天正17年(1589) 等伯51歳のとき、豊臣秀吉の茶頭・千利休は、大徳寺三門の増築部分を寄進する。その金毛閣二階の天井と柱に等伯は筆を揮ったのである。京都画壇に高らかに等伯の名を知らしめる第一歩であった。

花鳥図屏風③

長谷川等伯(信春) 6曲1隻 153.7×349.8cm 紙本金地着色
16世紀 個人蔵

●世紀の新発見

本展覧会にかかわる作品調査によって、等伯の作品であることがわかった。金碧画の花鳥図で、松や藤の花、滝の流れなどが優美に描かれている。松の樹皮や枝ぶり、鳥の描写などから等伯が「信春」と名乗っていた40歳前後の作品とみることができる。智積院の金碧障壁画を描く前から金碧画制作の実績を積んでいたことを示す極めて重要な作品である。

重要文化財 山水図襖④

長谷川等伯 4面 各176.7×94.5cm 紙本墨画
天正17年(1589) 京都・圓徳院蔵

●静かなる絵

もとは大徳寺三玄院の室内を飾っていた障壁画。等伯は同年に大徳寺三門一金毛閣の天井画、柱絵も手掛けている。等伯が京都画壇に確かな地盤を築きはじめた頃の作品である。中国名画に学び、自らのスタイルを模索しつつ描いた樹木や空気の描写には、代表作「松林図屏風」につながる水墨表現の萌芽がみられる。桐紋を散らした唐紙に描かれた珍しい水墨画である。

国宝 楓図壁貼付⑤・国宝 松に秋草図屏風⑥

4面・2曲1双 各172.5×139.5cm・各228.0×331.0cm 紙本金地着色
文禄元年(1592)頃 京都・智積院蔵

●極楽往生を願う金碧画

天正19年(1591)、3歳で夭折した豊臣秀吉の長男、鶴松の菩提を弔うために建立された京都の祥雲寺(現在の智積院)に描かれた障壁画。70cmを越える太い幹の楓は、両腕を広げるように雄々しい姿で描かれ、紅葉や木犀、鶏頭、萩、菊の草木は、幼くして亡くなった鶴松を包み込むように優しく画面を彩る。ライバル狩野永徳が創り上げた、画面から飛び出さんばかりに巨木などの対象を描く「大画様式」を意識しながら、狩野一門の作品にはみられない自然描写をみせ、なおかつ叙情性を備えた長谷川一門独自の美的特質が、みる者の目を奪う。



③



④

H A S E G A W A



⑥

◆一世一代の賭け― 三玄院襖絵

天正17年(1589)、等伯は大徳寺の塔頭(歴代住職の隠居所となる子院)、三玄院の襖絵に山水図を揮毫した。実は、この襖絵揮毫には、驚嘆すべき等伯のエピソードが残っている。等伯は、同院住職の春屋宗園に、法殿に襖絵を描くことを切望していたのだが許されなかった。そこである日、住職が留守と知った等伯は無断で部屋に駆け上がり、二気呵成に見事な山水図を描ききってしまったという。

一見、無謀ともいえるこの行動が吉と出たこともあって、等伯は、南禅寺、妙心寺など大寺院の障壁画制作の機会を得ていたのである。

図版④参照

天正十八年
(二五九〇)
五十二歳

◆永徳との対決― 御所の障壁画

狩野永徳は、名門狩野家の長子に生まれ、幼くしてその才能を開花させた。等伯より4歳年少の画壇の覇者は、織田信長、豊臣秀吉に仕え、さらに宮中の貴族にも密接にかかわって、さまざまな殿舎の障壁画に筆を揮っていた。一方の等伯は、30代で遅咲きの上洛を果たし、大寺院の住職、町衆や武将など京都の有力者たちと交わり、画業の修養を積んでいた。

この二人が直接対決したのは、天正18年(1590)、御所造営に際して対屋の障壁画制作を巡ったことだ。一度は等伯の運動が功を奏して襖絵揮毫の受注を得たが、永徳とその子、光信が宮中に申し出たことで阻止されてしまった。等伯派の勢力が狩野二門に伯仲しつづけた証となる事件であった。

この後、等伯は秀吉の子鶴松の菩提寺で、京都第の寺といわれた祥雲寺(現在の智積院)の障壁画制作という大事業を獲得した。

図版⑤、⑥参照



重要文化財 **仏涅槃図** ⑨
長谷川等伯 1幅 792.8×521.7cm(本紙部分)
紙本着色 慶長4年(1599)
京都・本法寺蔵

●三大涅槃図のひとつ
釈迦(ブツダ)の入滅の様子を描く。弟子たちや動物が集まり、釈迦の死を嘆き悲しむ。
華やかな描き表装を含めれば高さ10mにおよぶこの大涅槃図は、完成時に宮中で披露された後、等伯によって本法寺に寄進された。首を上下左右にゆくりと振らなければ全貌をみることはできない。その迫力のみる者を圧倒する。



12



8

重要文化財 **枯木猿猴図** ⑧
長谷川等伯 2幅 各155.0×115.0cm
紙本墨画 16～17世紀
京都・龍泉庵蔵

・東京会場：前期陳列[2月23日(火)～3月7日(日)]
・京都会場：後期陳列[4月27日(火)～5月9日(日)]
●縦横無尽の筆の技
当時もてはやされた中国の画家牧谿(もっけい)の国宝「観音猿鶴図」(大徳寺蔵)の猿図に学びながら、換骨奪胎して自らの筆法であらわした。ふわふわとした猿の柔らかな体毛と力強い樹木の輪郭線のコントラストが等伯の水墨画の真骨頂である。

せん の り きゅう どう
重要文化財 **千利休像** ⑦
春 屋宗園賛 長谷川等伯 1幅 80.6×36.7cm 絹本着色
文禄4年(1595)
京都・表千家不審菴蔵
●天下の茶人との交流
千利休没後5年めに描かれた肖像画。利休の個性が余すところなくあらわされている。等伯が生前の利休に相對し、その表情を写しとった画稿をもとに描いたもので、リアリティに富んだ描写がなされている。
絵の上部に記された賛文は、三玄院住職の春屋宗園が記した。宗園、利休、等伯の三人は大徳寺三門の増築の場で合見(あひみ)えている。彼らの交わりをうかがう上で、極めて貴重な肖像画である。



7

慶長四年
(二五九六)
六十一歳

◆一族への祈り― 大涅槃図

京都・本法寺の日通上人と等伯の関係は、篤く永きに渡るものであった。等伯は、よき理解者であった日通上人に強く信頼を寄せ、慶長4年(1599)に大涅槃図(仏涅槃図)を寄進する。さらに慶長10年(1605)には、本法寺の客殿・仁王門の建立施主となるほど、本法寺には多くのものを寄進した。等伯は本法寺の大檀越(だんだんち)となり、京都の有力な町衆となった。

大涅槃図の裏面には日蓮聖人以下の祖師たちの名、本法寺開山の日親上人以下の歴代住職、等伯の祖父母や養父母、そして将来の長谷川一門を担うべく期待をよせていた長男久蔵(26歳の若さで先立った)たちの供養銘が記されている。等伯の篤い信仰と一族への祈りが込められた作品といえる。

図版⑨参照

◆自己主張―自雪舟五代

信春時代に等伯が描いた仏画には「長谷川信春筆」の署名が書き込まれている。寺院に注文された仏画に絵師が署名を入れることは、非常に稀なことであった。

また後年、等伯は室町時代に活躍した雪舟の正当な後継者として、自らの作品に「自雪舟五代 長谷川法眼等伯筆」と書き込んでいた。大名たちに雪舟画が、たいへんもてはやされていたからである。

当時の絵師は、注文主の依頼のままだに絵を描いていたが、等伯は絵筆で自己表現することに加え、さらに強い自意識をサインの文字であらわしている。

図版⑩参照

重要文化財 ^{につうしょうにんぞう} 日通上人像^⑩

長谷川等伯 1幅 106.7×51.6 cm 絹本着色 慶長13年(1608) 京都・本法寺蔵

重要文化財 『等伯画説』^⑪

日通 1冊 27.3×20.0 cm 紙本墨書 16世紀 京都・本法寺蔵

● 篤い信仰と絆

本法寺第10世住職の日通上人の死に際し、等伯が70歳のときに描いた肖像画。日通上人は本法寺中興の祖といわれ、等伯とは住職と檀信徒という関係に留まらず、長きにわたり交友があった。控えめな色彩、力強い描線は、上人の清新な人柄までも写し取ったかのようである。画面からは、上人を失った等伯の悲しみを感じることができる。なお、この二人の交友から生まれたものが『等伯画説』である。日通は、等伯との会話から、等伯の絵画観、雪舟を意識した画系の流れ、等伯自身を物語るエピソードなど、折に触れ書き留めた。日本最古の画論書『等伯画説』は、二人の友情から生まれた奇跡的な史料といえよう。



⑩



⑪

重要文化財 ^{うろずびょうぶ} 烏鷺図屏風^⑫

長谷川等伯 6曲1双 紙本墨画 各154.0×354.0 cm 17世紀 千葉・川村記念美術館蔵

・東京会場：後期陳列[3月9日(火)～3月22日(月・休)]

・京都会場：前期陳列[4月10日(土)～4月25日(日)]

● 生きるものへのまなざし

晩年の代表作。流麗な筆のタッチで形作られた樹木を背景に、左に黒光りするカラス、右にサギを描く。カラスはぐるぐると激しく争い、サギはおだやかに飛翔し、羽を休めている。黒と白、動と静の強いコントラストが画面を満たしている。等伯は、カラスやサギのほか、猿や虎など動物たちをしばしば描いたが、それらの表現には動物たちへの優しいまなざしが感じ取られるものが多い。



⑨



慶長十五年
(一六一〇)
七十二歳

◆ 新天地・江戸への旅

豊臣の時代が去り、天下は徳川家康のものとなろうとしていた。等伯は新たなパトロンを獲得するため、二男の宗宅を伴い、高齡おして江戸へ下向する。後の長谷川一門の命運を賭けたものであったが、途中で病をえて、江戸到着後、二日めに72歳で等伯は亡くなった。等伯の没した翌年に宗宅も亡くなり、画壇のなかでの長谷川一門の命脈は尽きてしまった。

国宝「松林図屏風」 その魅力と謎

みる人すべてを魅了する松林図屏風は、さまざまな謎に満ちた作品でもある。その魅力とともに松林図がはらむいくつかの謎に迫る。

等伯の筆の技と構成力

画面に近づくと後ずさりするような迫力の筆づかい。その荒々しい筆づかいが、遠くからみるとうっすらと浮かび上がる松林の情景を生み出している。

四つほどの松林のグループが、緻密に計算されて配置されている。その配置によって涼やかな風が松林のなかを通り抜けていく。松が立ち並ぶ地面は、画面の手前に伸びていき、ある位置に立つと、みる人が松林のなかにいるかのような感覚を得ることができる。

墨の濃淡と粗速の筆のタッチだけで、霞に包まれた松林の情景が余すところなく表現されている。日本の水墨画の最高峰といわれる所以である。

完成作か、下絵なのか

通常屏風は、五枚位の紙を縦に継ぎ合せて一つの扇（屏風の折れ目と折れ目の間の面）の画面となる。その継ぎ目は、ふう横一線に揃うように貼られていく。しかし、松林図屏風では継ぎ目が乱れていることから、画面の紙は草稿用のものであり、





この松林図は下絵ではないのかという意見が出された。

また、完成作品であると考えた場合、左隻の左端には松の枝先が見えてとれ、画面はさらに左へ広がっていたことがわかる。

紙の質と墨の質

紙はふつうの屏風絵のものより粗末であり、その点からも松林図屏風が下絵であるという仮説が補強される。しかし、松を描く墨はつややかで、本画（完成作）に用いられるほどの最高級の質の墨が使われており、下絵と即断できない。

どんな筆で描いたのか

荒々しい松の葉を描いた道具がどのようなものであったか、よくわかっていない。連筆―筆を重ねたもの、藁をたばねて筆としたもの、あるいは筆先が固い蒔絵で使われる筆のようなもので描いたなど、さまざまな意見がある。

どこを描いたのか

等伯の故郷、能登半島の浜辺にある松林は、まさに松林図屏風の松林にみえる。等伯の心象風景が描かれたものなのだろうか。しかしみる人によって、天橋立、三保の松原、さらにはその人自身の記憶の風景とリンクする。

どこからみた風景なのか

山頂に雪が積もる遠山の裾野からみた風景である。日本古来の松を描いた絵といえば浜松図で、画面の中央に水景色が広がるものが多い。この絵に水辺はなく、つまり浜から松林をみた景色なのである。



松林のある時間

雪が積もる山が遠くに薄っすらと描かれている。季節は冬へと向かう晩秋であろうか。それとも雪解けの春であろうか。

朝靄がかかり、松林を流れる空気は冷たく感じられ、朝の情景のように感じられる。

後から捺された判子^お

屏風に捺された印は、ほかの等伯の作品にみえるものとまったく違うものである。後代、誰かが画面に捺したものと考えられている。

屏風の配置

印が捺された位置を左右の隅に置くのが、屏風の一般的な配置方法であり、松林図屏風も通常、そのように展示される。しかし、左右の屏風を入れ替えても、松林の情景は広がっていく。



国宝 しょうりん ずびょう ぶ 松林図屏風^⑬

長谷川等伯
6曲1双
各156.8×356.0cm
紙本墨画
16世紀
東京国立博物館蔵



げつ やしょうりん ずびょう ぶ 月夜松林図屏風^⑭

6曲1双
各150.5×351.0cm
紙本墨画
17世紀
個人蔵



近年、新たに知られることとなった月夜の情景の松林図屏風。国宝「松林図屏風」とほぼ同じ松林を描いているが、月が出て、紙の裏側全面に墨を塗る事で、夜の静けさがあらわされている。
作者については、等伯自身によるもの、等伯に非常に近い弟子、等伯の子、あるいは孫の代の絵師などさまざまな説が出されている。

HASEGAWA TOHAKU

400th Memorial Retrospective

東京国立博物館 | 京都国立博物館

国宝 「楓図壁貼付」(部分) 京都・智積院蔵